

I 調査研究の概要

1 ねらい

平成10年12月に告示された小学校及び中学校学習指導要領は、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図り、自ら学び自ら考える力等の「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。そのねらいを実現するために、教育課程審議会（以下教課審と略記）の答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」が平成12年12月に出された。

教課審答申では、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、個人内評価を工夫することが重要であると指摘した上で、指導要録の改訂に関するいくつかの提言をしている。その中で「評定欄」の記入に関しては、「現在いわゆる絶対評価を加味した相対評価をすることとされている各教科の評定を目標に準拠した評価に改める」としている。この点は、戦後一貫して評定を相対評価で行ってきた経緯を考えると大幅な変更点といえる。

これに対して、国立教育政策研究所（以下国研と略記）が「評価規準・評価方法等の研究開発（中間整理）」を出したり、いくつかの市町村や学校が評価規準表を独自に作成したりするなど、これまでに各方面で評価規準の研究が進められてきた。しかし、評価規準の活用方法、評価計画の立案の仕方、評定の付け方等、具体的な評価場面においてまだまだ研究すべき点があるように思われる。また、観点別学習状況の評価と評定がともに目標に準拠した評価になることによって、両者の違いや関連を明確にする必要がある。

そこで、本研究は、目標に準拠した評価が児童生徒の学力の向上や学習指導法の改善にどのように結びつくのか、指導要録の「評定欄」の評価方法が目標に準拠した評価へ移行することによって、評価方法をどのように改善する必要があるのかについて考察するものである。本年度は継続研究の1年目に当たり、さまざまな評価法の特性を押さえた上で、小学校算数科及び体育科、中学校数学科及び体育科を対象に事例研究をした。

2 構想

(1) 仮説

ア 評価規準の設定の仕方や評価方法を工夫すれば、目標に準拠した評価の客観性・信頼性を図ることができる。

イ 目標に準拠した評価の特性を生かして学習を展開すれば、児童・生徒は個に応じた学習ができるとともに、基礎的・基本的な内容を確実に習得することができる。

(2) 方法

ア 目標に準拠した評価等の特性を明らかにした上で、適切な評価規準の設定の仕方や評価方法について考察する。

イ 目標に準拠した評価を取り入れることが、学習指導の改善にどのように結びつくかを分析し、考察する。

II 調査研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 集団に準拠した評価と目標に準拠した評価の特性

表1 集団に準拠した評価と目標に準拠した評価の比較

集団に準拠した評価（相対評価）	目標に準拠した評価（絶対評価）
① 正規分布を前提とし、学習状況の客観的な位置づけ意味づけを行う評価である。	① 評価規準を学習に先立って設定でき、学習過程で到達状況が把握できる評価である。
② 自己の適性を知るのに適している。	② 児童生徒の学習への意欲、進歩の状況を把握しやすく、きめ細かい指導ができる。
③ 他の児童生徒と比較し、無用な競争心を生みやすい。	③ 基礎的・基本的な内容の定着に適している。
④ 評価の客観性・信頼性が高い。	④ 主観的な評価になりやすい。

(2) 目標に準拠した評価で求められること

- ア 間主観化への道
- イ 内容に準拠した評価の重視
- ウ 教員配置の工夫
- エ 個別的な指導体制の充実
- オ 履修主義から習得主義へ
- カ 問題作成能力の向上

2 目標に準拠した評価の評価手順

- <手順1> 単元の評価規準を設定する。
- <手順2> 評価計画を立てる。
- <手順3> 観点別学習状況の評価を付ける。
- <手順4> 評定を付ける。

(1) 小学校体育第6学年「跳び箱運動(器械運動)」の事例

ア 評価規準の設定

国研の評価規準を参考にし、次のように評価規準を設定した。

表2 評価規準表

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
・跳び箱運動に進んで取り組もうとする。 ・友達と協力し励まし合い、器械や器具の使い方に注意して安全に運動しようとする。	・学習の進め方、学習の資料の使い方を知り、自分に合った課題をもつことができる。 ・自己の能力に合った課題を達成するために、運動や練習の仕方を工夫することができる。	・跳び箱運動の特性に応じた技能を身に付け、安定した動作での支持跳び越しができる。

イ 評価計画の立案

時間ごとの具体的な活動内容を想定し、観点別学習状況の評価規準にふさわしい具体的な学習場面を選び、その場面に合ったA規準とB規準をレベルに差をつけて設定した。

表3 評価計画

次	時	学習活動	具体的な評価規準	A 規 準	B 規 準
1	1	サマエテマツル 学習の進め方、学習資料の使い方を 知る。 ○開脚とび	関①学習カードや資料の使い方に関心を持ち、学習する技のポイントを理解しようとする。 <small><学習カード、ノート、行動観察></small>	学習カードや資料の使い方に強く関心を持ち学習する技のポイントを理解している。	学習カードや資料の使い方に関心を持ち、学習する技のポイントを理解しようとする。
	2	○かかえこみとび	思①自分の技のレベルを調べ自分の課題を見つけることができる。 <small><学習カード、ノート、行動観察></small>	自分の技のレベルを調べ、自分の課題を見つけ、技のポイントを確かめることができる。	自分の技のレベルを調べ、自分の課題を見つけることができる。
	3	○下向き横とび ○台上前転			

ウ 観点別学習状況の評価・評定

表4 評価表

観点	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
関心・意欲・態度	①	A			A		CB	A	A		A	
	②	A			A		A	A	A	C	A	
	③	A	A		A			A	A	C	A	
	④	A		C	A	A	A	A	A		A	
	評価	A	B	B	A	B	B	A	A	C	A	
思考・判断	①②	A			A	A	A	A	A	C	A	
	③	A			A	A	A	A	A	C	A	
	④				A	A	A	A			A	
	⑤	A		C	A		A	A	A		A	
	⑥	A	A									
⑦	A		C	A		A	A	A	C	A		
評価	A	B	C	A	B	A	A	A	C	A		
技能	①	ア	6A	6A	6	2・6	3	0・6	7	3・6	7A	3・6
	②	イ	6	6		4・7	5		7	4		4・6
	ウ	4	4	4	4		4		4	3	5	
	エ	4	6	6					4	3	5	
	オ	A	A	B					A	B		
評価	A	A	B	B	B	B	A	B	B	B		
伸長度				A		A		A		A		
総合評定		3	2	2	3	2	2	3	3	1	3	

<観点別学習状況の評価の基準>

- 関心・意欲・態度
4項目ともA→A
Cが1項目以下→B
Cが2項目以上→C
- 思考・判断
5項目ともAで、Cがない→A
Cが1項目以下→B
Cが2項目以上→C
- 技能
省略

<評定の基準>

- Aが3つの場合→評定3
- Aが2つBが1つの場合→3と2の境界
- AとCが1つ以下の場合→評定2
- Cが2つBが1つの場合→2と1の境界
- Cが3つの場合→評定1

(2) 中学校体育第2学年「陸上競技」の事例

ア 評価規準の設定

- 単元が終了した時点での教師のA～Cの生徒のイメージを重視し、評価規準を設定した。
 A→自分のことはしっかりできる。級友のことを考えて行動できる。(しようとしている)
 B→自分のことはできる。(できるように努力している)
 C→自分のことができない。(やろうとしない)

表5 評価規準表

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
A規準	・各自の課題の克服のために日々熱心に活動している。 ・班活動で常にリーダーシップを発揮している。	・自分の能力、適性に応じた学習課題をもつことができる。	・各種目の特性を理解し、それぞれの種目の技術的なポイントをおさえて実践することができる。	・「学び方」を身につけており、効率のよい練習方法についても知識がある。
B規準	・課題解決のため、練習や記録会に取り組み、楽しく活動することができる。 ・協力して準備や後始末を行い、安全面に留意し活動している。	・自分の能力や適性を考え、意欲的に取り組めるような学習課題をもつことができる。	・各種目の特性を理解し、それぞれの種目の基本的な技能を身につけている。 ・自分の能力に適した技能のポイントをつかみ、技能を高めることができる。	・自分の能力にあった課題のもち方及びそれに応じた練習の仕方等の学び方について理解し実現しようとしている。

イ 評価計画

表6 評価計画表

規準	時間	★Aの重点項目 ○観察法による評価 ○学習ノートによる評価															
		1・2	3	4	5	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	
関心・意欲・態度	★意欲的に根気強く学習に取り組んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	★一生懸命ウォーミングアップをしている		○							○							
	忘れ物がない																
	正しい服装をしている																
	言葉遣いが適切だ																
	移動をかけ足で行っている			○										○			
	勝敗や結果に対して公正な態度がとれる				○								○			○	
	活動場所を点検する等、安全に学習できる				○												
	★準備や後始末に率先して取り組む		○					○	○								
	教え合い、励まし合って学習している			○		○	○				○		○	○	○		
思考・判断	★自分の力に合った学習課題をもっている				○	○	○			○	○	○	○	○			
	★課題達成のために活動内容を工夫している				○	○	○			○	○	○	○	○			
	活動場所の設定や条件を工夫している			○											○		
	学習ノートを活用し1時間をまとめている		○							○							
自己評価を適正に行うことができる		○		○					○	○		○			○		

ウ 観点別学習状況の評価・評定

表7 評価表

評価規準	生徒	1	2	3	4	5
① 関心・意欲・態度	★意欲的に根気強く学習に取り組んでいる		A		A	C
	★一生懸命ウォーミングアップをしている	A				C
	忘れ物がない		A	C	A	
	正しい服装をしている	A	A	C	A	C
	言葉遣いが適切だ		A		A	
	移動をかけ足で行っている			C	A	C
	勝敗や結果に対して公正な態度がとれる					
	活動場所を点検する等、安全に学習できる					C
	★準備や後始末に率先して取り組む	A		C	A	C
	教え合い、励まし合って学習している			C	A	C
評価						
② 思考・判断	★自分の力に合った学習課題をもっている				A	C
	★課題達成のために活動内容を工夫している				A	C
	活動場所の設定や条件を工夫している				A	
	学習ノートを活用し、1時間をまとめている		A		A	C
	自己評価を適正に行うことができる					C
評価						
③ 技能	★基本的な技能を身に付けることができる		A		A	C
	仲間に技術的な助言ができる				A	C
	学習課題(目標記録)を達成できる	C	A	C	A	C
評価						
④ 知識・理解	★資料の活用が上手で、知識が豊富である		A			
	公式・ルールを知り、公正に競技ができる	C	A			
	★状況を判断し、安全に留意して活動できる		A	A	A	C
	ペーパーテストで高得点をとる	C	A			
評価						

<観点別学習状況の評価の基準>

A=1、B=0、C=-1とし、次の基準で判定

	A	B	C
関・意・態	6以上	5～3	2以下
思考・判断	3以上	2・1	0以下
技能	3・2	1	0以下
知識・理解	2以上	1	0以下

<評定の基準>

A=5、B=3、C=0とし、次の算出方法で判定

(関心・意欲・態度)	×3
(思考・判断)	×1
(技能)	×2
+	(知識・理解) ×1
	(合計) ポイント

評定	ポイントのめやす
5	35～28
4	27～22
3	21～16
2	15～12
1	11～0

(3) 小学校体育・中学校体育の実践のまとめ

中学校体育のように教科担任制の場合、複数の教師が評価にかかわり、多くの生徒を同じ基準で判定するので、A基準とB基準の違いが明確になっていなければならない。今回の実践では、A基準とB基準を別々の場面で設定したり、評価や評定の基準を点数化したりしたので、評価はしやすかった。これに対して、小学校体育の場合は、1クラスを3件法で評価すること、担任が評価するので児童の実態を十分把握していること、評価者が担任一人であることから、A基準とB基準のレベル差をそれほど明確にしなくても客観性を図ることができた。

3 目標に準拠した評価の特性を生かす工夫

(1) 小学校算数第5学年「平行四辺形の面積」の事例

ア 評価規準について

児童の多様な考えを重視し、その良さを評価するように評価規準を設定した。

〈関心・意欲・態度〉①自力解決の場面で2通り以上の解き方をした。A 1通りはB

②次時において前時の友達の考えを活用している。A

①は創造する (produce) ことへの関心・意欲・態度、②は再生する (reproduce) ことへの関心・意欲・態度を評価したいと考えた。そのでき具合は知識・理解で評価した。

〈表現・技能〉①垂直の印を記入している。A

②明らかに垂直にせず高さを記入している。C

平行四辺形の求積で最もつまずきやすいのは高さに関することである。そこで高さの意味が分かり、高さを底辺に垂直に測ることができることに重点をおいた。

さらに児童の求積方法を類型化し、児童の思考過程にそった評価規準を設定した。

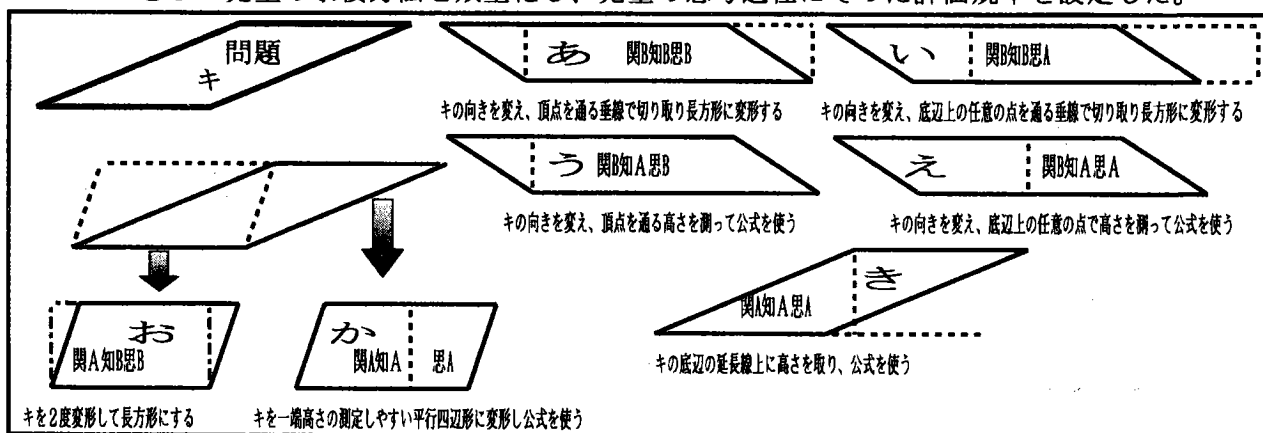


図1 求積方法の類型化

表8 評価規準表

考え方	類型	あ	い	う	え	お	か	き
〈関心・意欲・態度〉 向きを変えずに工夫して求積しようとしている		関B	関B	関B	関B	関A	関A	関A
〈知識・理解〉 既習事項 (公式) を使って求積できる		知B	知B	知A	知A	知B	知A	知A
〈思考・判断〉 高さを底辺の任意の地点で測ることができる		思B	思A	思B	思A	思B	思A	思A
〈思考・判断〉 あ～き以外の独創的な方法で求積する		思A						

イ 評価結果の活用

評価結果を分析することで、児童の学習の進め方や考え方には、ある固有の傾向を読みとることができる。それを次のように分類した。

①関心・意欲・態度のAが8個以上……C、D、G、Hの児童

1つの求積方法に飽き足らず、いろんな方法で求積しようとするタイプ

②知識・理解のAが4個以上……A、D、E、Gの児童

学んだ公式を活用して、能率よく求積しようとするタイプ

③表現・処理のAが5個以上……B、D、E、Gの児童

底辺に垂直に高さを測り、作業を正確に行うタイプ

④他が多い児童……C、D、F、Hの児童

独創的な考えを好むタイプ

Aの児童は表現・処理の能力は高く、学んだ公式を活用して、能率よく求積することが得意である。しかし、1つの求積方法が見つければ他の方法で解いてみようとしなない面がある。この児童には多様な考え方に対するこだわりをもつように指導すれば、さらに学力の伸長が期待できる。Dの児童は①～④のすべての項目に優れ、Aの総数でも多く、相対評価では最上位の成績である。しかし、考え方のAが1個で、高さの取り方等の面で考え方に硬さがみられる。今後、この児童には思考の柔軟性を育てる指導が求められる。

表9 評価表 ※ウ～クは図形の種類を表す 他は教師の予想を超えた独創的な考え方をした場合を示す

次	学習活動	児童名							
		A	B	C	D	E	F	G	H
1	ウ 考え方の類型	あ	あ	あい	あい	あ	あ他	あい	あ他
	ウ 評価(自力解決)		A	A, A	A, A	A	A, A, A	A, A, A	A
	ウ 評価(話し合い)	A			A	A	A	A	A
	キ 考え方の類型	え	あ	お	か	う	え	おき	あ他
	キ 評価(自力解決)	A, A	A	A	A, A, A	A, A	A, A, A	A, A, A, A	A, A, A, A
2	エ 考え方の類型	い	あ	他	あい他	か	か他	他	い他
	エ 評価(自力解決)		A	A, A	C, C	A, A, A	A, A, A	A, A, C, A	A, A, A, A
	エ 評価(話し合い)		A			A	A	A	A
	ク 考え方の類型	う	他	う他	うお他	おう	え	かき	あき
	ク 評価(自力解決)		A	A, A	A, A	A, C, A	A	A	A, A, A, A
3	オの求積(選択)				他			え	う
	カの求積(選択)	あ	あ	あうお他	い	い	え	い	あえ
	評価			A, A, A	A, A, A		A	A, A, A	A, A, A
集計	Aの数	2, 1, 1, 4	2, 1, 5, 2	8, 2, 1, 1	8, 1, 6, 5	5, 2, 5, 4	5, 3, 4, 3	10, 6, 6, 4	9, 3, 4, 2
	Cの数								

ウ TT教員の果たした役割

評価規準の妥当性は、そのクラスの学習状況や学習方法を前提に成立することが分かった。同じ評価規準を複数のクラスで使う場合には、授業展開、教材教具に至る授業の細かい部分まで合わせる必要がある。今回の場合はTT教員が授業の細かい部分まで学年で統一して実践した。今回のTT教員のように評価に関して学年をリードする教師の要請が求められる。

(2) 中学校数学第1学年「一元一次方程式」の事例

ア 基礎的・基本的な内容の確実な定着を旨とする学習展開の工夫

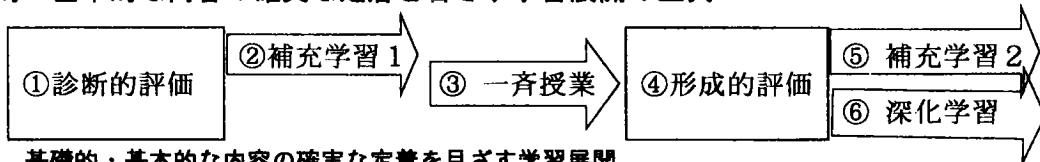


図2 基礎的・基本的な内容の確実な定着を旨とする学習展開

単元テスト

- 「 -2 は、方程式 $4x + 5 = -3$ の解ですか。」この問題で、Aさんは方程式の解とは何かわからず困っています。そこで、この問題の解き方がAさんにわかるように、あなたならばどのように説明してあげますか。
- 等式の性質を使って次の方程式を解きました。左の式から右の式への変形のしかた(ア)～(エ)について、それぞれことばで説明しなさい。
 (1) $5x - 3 = 15 + 2x \rightarrow 5x = 18 + 2x \rightarrow 3x = 18 \rightarrow x = 6$ (ア) (イ) (ウ)
 (2) $2/3x = 8 \rightarrow x = 12$ (エ)
- 次の方程式を解きなさい。ただし、(1)(2)は等式の性質を使って解きなさい。
 (1) $x + 6 = 4$ (2) $-14x = 7$ (3) $2x - 3 = 4$ (4) $3x = 28 + 7x$ (5) $2x + 13 = -3x - 7$
- $2/3x - 1/2 = x + 2$ を解くには次の2つの方法があります。
 <ア> 分数のままでも移項を使って解く方法 <イ> まず分母をはらって解く方法
 あなたならば分数を係数にふくむ方程式を <ア> <イ> どちらの方法で解きますか。あなたが選んだ方法でこの方程式を解きなさい。また、その方法を選んだ理由も答えなさい。
- 次の方程式を解きなさい。
 (1) $x + 0.6 = 0.2x - 1$ (2) $x + 1 = x/3 + 3$ (3) $80x - 50 = 60x - 20$
- A地とB地の間を往復するのに、A地からB地までは毎時4kmの速さで歩き、B地からA地までは毎時5kmの速さで歩いたら4時間30分かかった。A地とB地の間の道のりを求めなさい。
- 「80円のえんぴつと120円の色えんぴつを合わせて10本買ったなら、1400円になりました。それぞれ何本買ったのでしょうか。」この文章題は解けません。理由を説明してください。

イ 評価結果の活用

表現・処理を評価した問題4～7をほぼ解いた生徒が35人中16人に対して、問題3の等式の性質が説明できる生徒が5人と少なかった。問題3は方程式の基礎的・基本的な内容の問いのように思えるが、生徒にとっては意外に難しかった。4観点すべてがAの生徒は6人で、そのうち4人の生徒が問3を解いている。これらのことから、多くの生徒は知識・理解より表現・処理に重点をおいて学習しているのではないかと、授業やテストで問3のような内容に重きを置くことが学力の向上に効果的ではないかと推測できる。

ウ 問題作成能力の向上

形成的評価と補充学習・深化学習を組み合わせると、基礎的・基本的な内容の定着と個に応じた指導が可能である。こうした学習展開は、質の高い評価テストや補充プリント・深化プリントを作成して初めて成立するものである。教師には、高い問題作成能力が求められる。

Ⅲ 調査研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 目標に準拠した評価の特性について

教課審答申と評価史を手がかりに、目標に準拠した評価は基礎的・基本的な内容の確実な定着や個に応じた指導に適している反面、教師の主観が入りやすいという課題等を整理し、その解決策を検討した。複数の教師で問題を出したり、児童生徒の学習状況を評価したりする場面で、教師が自分の主観を他の人の主観に照らし合わせる（間主観化）ことによって、評価の客観性・信頼性を高めていくことが重要である。

(2) 評価規準の設定について

評価規準は、単元終了後に教師が望む児童生徒の姿(goal)を基に、いつまでに、何を、どんな方法でとらえて価値判断するのかといった視点を重視し、学習指導要領や教科書を手がかりに、地域の特性、児童生徒の実態、指導方法・内容等を加味して設定する。

評価規準の妥当性は、そのクラスの学習状況や学習方法を前提に成立するので、異なる学習集団の児童生徒にそのままあてはめることは必ずしも適当ではない。

(3) 評価手順について

目標に準拠した評価の特性を重視した評価活動を実践してみて、評価場面を厳選しないと授業が疎かになること、評価場面には、教科の基礎的・基本的な内容を身に付けるべき重要な場面を選ぶと適切に行われること、評価計画を立てる段階で、評価法・評価する上での材料の選定に至る細部まで決めると評価しやすいことが明らかになった。

(4) 指導と評価の一体化について

形成的評価と補充学習・深化学習を組み合わせることによって、目標に到達できなかった児童生徒は基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ることができ、到達度の早い児童生徒は高度な学習に意欲的に取り組むことができる。

目標に準拠した評価の結果を分析することによって、児童生徒の良い点を評価したり、学力を伸ばさせるための学習方法を適切にアドバイスしたりできる。また、指導法の改善のための手立てを得ることができる。

(5) 評価の省力化・実用化

評価活動によって教員の負担は多くなるが、教師の教科指導力の向上と教師集団の円滑な運営によってかなり省力化できる。また、評価の省力化が教師の教科指導力を向上させる面があることが分かった。

2 今後の課題

(1) 目標に準拠した評価を重視すると、きめ細かい評価が求められるが、教師が評価に割ける時間には限りがあるので、今後さらに評価を省力化・実用化するための研究を進めていく必要がある。また、随時に複数の教師集団で評価の妥当性を図ると同時に、単元の目標や評価規準の部分修正をしていくことが大切となる。

(2) 目標に準拠した評価の客観性・信頼性は、間主観化によって高めることができると述べてきたが、教課審答申の「評価の目的に応じて、評価する人、評価される人、それを利用する人がお互いに、評価の目的に応じておおむね妥当であると判断できる」ように、今後さらに児童生徒や保護者に対する説明責任に耐えうる評価方法の研究を進めていかなければならない。

**児童生徒の学習状況の
評価規準、評価方法等の研究**

— 目標に準拠した評価の在り方 —

富山県総合教育センター
教育研究部

答申における評価の重点

大綱な要約

指導要録「評定欄」の記入方法
相対評価 → 絶対評価

研究のねらい

- 評価方法をどのように改善するか。
- 評価を学力の向上や指導法の改善にどのように生かすか。

目標に準拠した評価(絶対評価)

- ① 学習に先立って評価規準の設定
- ② 実態把握
- ③ 基礎基本の定着
- ④ **主観的な評価になりやすい。**

目標に準拠した評価で求められること

ア 問主観化
イ 内容に準拠した評価
ウ 教員配置の工夫
エ 個別的な指導体制
オ 習得主義
カ 問題作成能力

評価手順に配慮した事例

	小学校体育	中学校体育
評価者	1人 (学級担任)	2人 (教科担任)
評価対象	1クラスの児童	4クラスの生徒

小学校体育と中学校体育の比較

小学校体育	中学校体育
① 評価規準の設定	① A規準とB規準の設定
② 評価場面の選定	② 細かい規準の設定
③ 評価場面にあった細かいA規準とB規準の設定	③ A規準の評価場面とB規準の評価場面をそれぞれ選定
④ 観点別の評価	④ 観点別の評価
⑤ 評定	⑤ 評定

小学校体育の評価手順

<手順1> 評価規準の設定

関心・意欲・態度	思考・判断	技能
・遊び場運動に進んで取り組もうとする。 ・友達と協力し楽しみ、励まし合い、励まされたい方に注意して安全に運動しようとする。	・学習の進め方、学習の資料の扱い方を知り、自分に合った課題をもつことができる。	・遊び場運動の特性に応じた技能を身に付け、安全した動作での支持遊びができる。

中学校体育の評価手順

<手順1> 評価規準の設定

A~Cの生徒像

A→自分のことはしっかりできる。級友のことを考えて行動できる。

B→自分のことはできる。

C→自分のことができない。

中学校体育の評価手順
＜手順1＞ 評価規準の設定

関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
A 規準 自分の課題の達成のために日々意欲に満ちている。達成感で溢れ、リーダーシップを発揮している。	自分の能力、課題に意欲的に取り組むことができる。	各項目の特色を理解し、それぞれの得意分野の技術が身に付いている。	「学び方」の重要性を理解し、学習の進め方や学習資料の使い方を理解している。
B 規準 課題達成のため、練習の意欲に満ち、目標を設定し、達成することができる。協力して練習や課題を克服し、学習に取り組んでいる。	自分の能力や課題を認識し、目標を設定することができる。	各項目の特色を理解し、自分の得意分野の技術が身に付いている。	自分の「学び方」の重要性を理解し、学習の進め方や学習資料の使い方を理解している。

小学校体育の評価手順
＜手順2＞ 評価計画の立案

学習活動	評価規準	A 規準	B 規準
1 ①「トレーニング」の学習の進め方や学習資料の使い方を理解している。 ②理解している。	① 学習カードや資料の使い方に意欲的に取り組む。学習するポイントを確認し、学習しようとする。	学習カードや資料の使い方に意欲的に取り組む。学習するポイントを確認し、学習しようとする。	学習カードや資料の使い方に意欲的に取り組む。学習するポイントを確認し、学習しようとする。
2 ③かえりこみと④下向き跳びの合上動作	③ 自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。	自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。	自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。
3	④ 自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。	自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。	自分の体のレベルを調べ、自分の課題を見つけて、自分の課題を克服することができる。

中学校体育の評価手順
＜手順2＞ 評価計画の立案

規準	1	2	3	4	5	6	7	8	9
① 意欲的に課題に取り組んでいる。 ② 意欲的に課題に取り組んでいる。 ③ 意欲的に課題に取り組んでいる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑤ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑥ 意欲的に課題に取り組んでいる。			○						○
⑦ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑧ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑨ 意欲的に課題に取り組んでいる。				○					
⑩ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑪ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑫ 意欲的に課題に取り組んでいる。					○				
⑬ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑭ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑮ 意欲的に課題に取り組んでいる。						○			
⑯ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑰ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ⑱ 意欲的に課題に取り組んでいる。							○		
⑳ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ㉑ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ㉒ 意欲的に課題に取り組んでいる。								○	
㉓ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ㉔ 意欲的に課題に取り組んでいる。 ㉕ 意欲的に課題に取り組んでいる。									○

小学校体育の評価手順
＜手順3＞ 観点別学習状況の評価
＜関心・意欲・態度＞

項目	1	2	3	4	5
項目①	A	A			
項目②	A	A		C	
項目③	A	A		C	C
項目④	A	A			
評価	A	B	B	B	C

基準
4項目ともA→A
Cが1項目以下→B
Cが2項目以上→C

中学校体育の評価手順
＜手順3＞ 観点別学習状況の評価

学習活動	1	2	3	4	5
① 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
② 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
③ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
④ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑤ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑥ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑦ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑧ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑨ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑩ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑪ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑫ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑬ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑭ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑮ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑯ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑰ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑱ 意欲的に課題に取り組んでいる。			A	A	C
⑲			A	A	C

小学校体育の評価手順
＜手順4＞ 評定

観点	1	2	3	4	5
関心・意欲・態度	A	A	B	A	B
思考・判断	A	B	C	A	A
技能	A	B	B	B	B
仲間関係			A	A	
評価	3	2	2	3	2

評定の基準
Aが3つ→3
Cが3つ→1
AとCが1つ以下→2
Aが2つBが1つ→境界
Bが1つCが2つ→境界

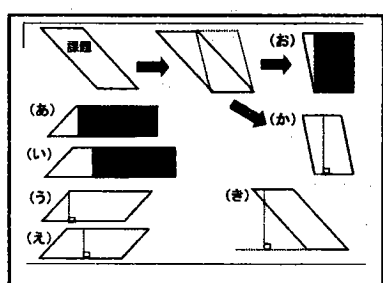
中学校体育の評価手順
＜評定の基準＞

A=5、B=3、C=1

観点	1	2	3	4	5
関心・意欲・態度	5	4	3	2	1
思考・判断	5	4	3	2	1
技能	5	4	3	2	1
仲間関係	5	4	3	2	1
合計	20	16	12	8	4
ポイント	11~20	7~10	4~6	2~3	1

評価を指導に生かす事例

小学校算数	中学校数学
評価担当者 T T 教員 学級担任	教科担任
評価者人数 2人	1人
評価対象 1クラスの児童 学年共通の評価規準	学年の生徒
事例の特徴 多様な思考を重視	テストと課題を重視



中学校数学
評価結果の分析

<問題3の正解者・不正解者の内訳>

	4観点とも Aの生徒	4観点をBC を含む生徒	合計
正解者	4人	1人	5人
不正解者	2人	28人	30人
合計	6人	29人	35人

中学校数学
実践のまとめ

- テストやレポートを中心に評価する場合は、質の高い問題や課題を作成することによって客観性・信頼性を高めることができる。
- 評価結果を分析することによって、指導法改善の手だてを得ることができる。

研究の成果

- 目標に準拠した評価の特性
- 評価規準の設定
- 評価手順
- 指導と評価の一体化
- 評価の省力化・実用化

目標に準拠した評価の特性

- 基礎的・基本的な内容の定着に適している
- 個に応じた指導に適している
- 教師の主観が入りやすい
- 簡主観化を図ることにより、評価の客観性・信頼性を高めることができる

評価規準の設定

- 児童生徒の姿をもとに、いつまでに、何をどんな方法でとらえて評価判断するか
- 地域の特性、児童生徒の実態、指導方法・内容等を加味する

評価手順

- 評価場面の厳選
- 基礎的・基本的な内容を身に付けさせる場面
- 評価方法・評価材料の選定

指導と評価の一体化

- 形成的評価と補充学習・深化学習を組み合わせることで、基礎的・基本的な内容の定着を図ることができる
- 目標に準拠した評価の結果を分析することにより、指導法改善の手立てを得ることができる

評価の省力化・実用化

- 教師の教科指導力の向上と教師集団の運営によって省力化できる
- 評価の省力化が教師の教科指導力を向上させる

今後の課題

- 評価の実用化
- 説明責任に耐える評価方法